群教セ	H01 － 01
	令6.287集
	幼児教育

友達と共通の目的に向かって協働する幼児を育む

――もめごとを幼児一人一人に応じて良質な刺激に変える教師の関わり――

特別研修員　関川　香里

Ⅰ　研究テーマ設定の理由

変化の激しい現代社会において一人一人が幸福な人生を創り出していくために、自己の感情や行動を調整する能力や、よりよい生活や人間関係を形成する態度を育むことが求められている。このことを踏まえて、群馬県教育ビジョンでは、友人と協力して課題を解決し、自分たちの力でよりよい方法を考える姿勢を育むことの重要性が示されている。

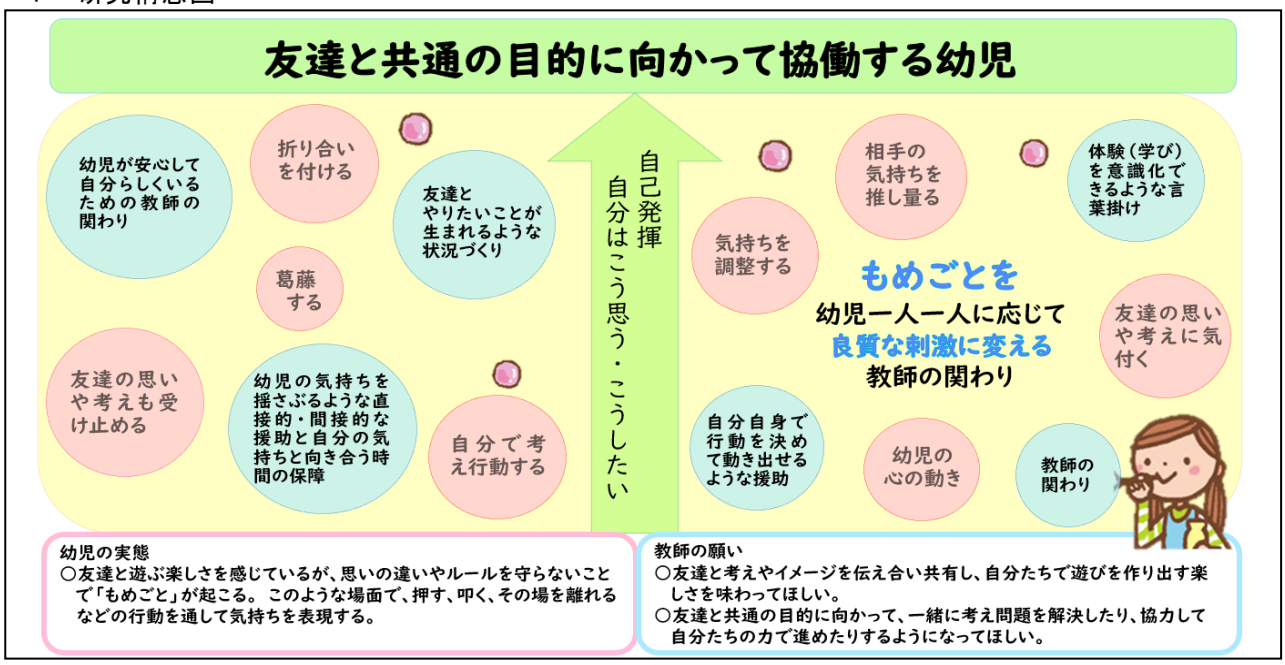
幼児期は、他の幼児や教師と触れ合う中で、自分の感情や意志を表現しながら共に遊ぶ楽しさを味わう。その一方で、友達と様々な出来事を通して心を動かし、時には自己主張のぶつかり合いから悔しさや悲しさなども経験し、友達関係を深めていく。そして、友達と遊ぶ中でやってみたいことが生まれると、工夫したり協力したりして遊ぶようになる。

研究協力園の幼児（５歳児）たちに目を向けると、幼児が友達と一緒にいるよさを感じているものの度々「もめごと」が起こるという実態が見えてきた。そして、押す、叩くなどの行動で自分の思いを表現したり、その場を離れたりして遊びが継続しない様子も見られる。そこで、日常生活にある「もめごと」を通して、葛藤し気持ちを調整したり、友達の思いや考えに気付いて理解し合ったりするなど、自分の気持ちと向き合い葛藤を乗り越える経験を重ねることが重要であると考えた。

以上のことを踏まえ「もめごと」を幼児一人一人に応じて良質な刺激に変えることで、幼児の心を揺り動かし、自分で納得して次に進めるようにする。これにより『人と関わる力』の基礎となる資質・能力を育み、本研究テーマに迫る。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　研究上の手立て

本研究では、友達と共通の目的に向かって協働する幼児を育むために、以下の手立てを行う。

手立て　「もめごと」を幼児一人一人に応じて良質な刺激に変える教師の関わり

・幼児が安心して自分らしくいるための教師の関わり（ア）
・友達とやりたいことが生まれるような状況づくり（イ）
・体験（学び）を意識化できるような言葉掛け（ウ）
・自分自身で行動を決めて動き出せるような援助（エ）
・幼児の気持ちを揺さぶるような直接的・間接的な援助と、自分の気持ちと向き合うための時間の保障（オ）

友達と共通の目的に向かって協働するようになるためには、幼児が思いや願いをもって遊ぶ中で自分らしさを発揮することが必要である。そして、友達と思いや考えを共有し目的が生まれると、工夫したり協力したりして遊ぶようになっていく。しかし、時には、幼児同士の思いのぶつかり合いによって「もめごと」が起こる。このことを幼児の育ちを促す大切な出来事と捉え、上記の手立てを通して、幼児の気持ちを揺さぶるような関わりをすることで、友達と相反する思いと自分の感情に心が揺り動かされると考える。そして、友達の思いや考えに気付き、受け止めたり折り合いを付けたりする経験を重ねながら互いに協力して遊ぶようになると考える。このように「もめごと」を幼児一人一人に応じて良質な刺激に変える教師の関わりにより、友達と共通の目的に向かって協働する幼児を育む。

Ⅲ　実践例

１　研究に関連する実践当日のねらい及び内容

(1)　ねらい（５歳児２学期）

友達と共通の目的をもち、思いやイメージを伝え合いながら目的を実現するように遊ぶ。

(2)　内容

・興味や目的が重なる友達と、思いやイメージを伝え合いながら遊ぶ。
・いろいろな道具や素材を使いながら見立てて遊んだり、イメージをもったりして遊ぶ。

２　幼稚園教育要領上の位置付け及び環境の構成の視点

「幼稚園教育要領解説」（平成30年３月）では、幼稚園教育において育みたい資質・能力は「幼児の発達の実情や幼児の興味や関心等を踏まえながら展開する活動全体によって育むものである」と述べられている。また、「遊びの中で幼児が発達していく姿を,幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を念頭に置いて捉え,一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど指導を行う際に考慮する」と記されている。本実践のねらいを踏まえて、幼児の具体的な姿から発達や発達の方向を捉え、その時期にふさわしい経験を重ねることができるように、次の環境の構成の視点をもって保育を展開することとした。

(1)　研究に関わる５歳児の指導計画

期	10	11	12	13	14
月	4月～5月中旬	5月中旬～7月	9月～10月中旬	10月中旬～12月 （接続期）	1月～3月 （接続期）
発達の過程	自分なりに遊びに取り組んだり、気の合う友達と一緒に遊んだりしながら、新しい環境に慣れていく時期	自分の思いを伝えながら、友達と一緒にいろいろな遊びに取り組み、自分を発揮する時期	目的に向かって自分なりに頑張ったり友達と力を合わせたりしながら遊ぶ時期	友達関係を深めながら共通の目的に向かって自分たちでより楽しく遊びを進めようとする時期	一つのことにじっくりと取り組んだり、友達と仲間意識をもって遊びや生活を進めたりして、自信をもって行動する時期

研究に関するねらい（○）及び内容（・）	○気の合う友達と一緒に遊ぶことを楽しむ。 ・気の合う友達に自分の考えを言葉で伝える。	○気の合う友達と一緒に、考えたり試したりしながら遊ぶ。 ・自分なりの思いやイメージを友達に伝えたり、一緒に考えたりしながら遊ぶ。	○思いや考えを伝え合いながら、友達と一緒に遊びを進める。 ・遊び方やルールを友達と一緒に考えたり、共有したりしながら遊びを進める。	○友達と共通の目的をもち、話し合いながら自分たちで遊びを進めていく楽しさを味わう。 ・友達と思いを伝え合ったり、遊び方やルールを話し合ったりしながら自分たちで遊びを進める。	○共通の目的に向かって友達と相談したり協力したりしながら最後まで取り組むことで達成感や充実感を味わう。 ・自分の力を発揮したり友達と認め合ったりする。 ・遊びに必要なものや遊び方を友達と相談し、自分たちで遊びを進める。

(2) 本実践につながる抽出児の姿（抽出児Ａ児）

○　１学期、労務技師が作業をしていると話し掛け、そばで様子を見ていることが多かった。６月になると、テーブルや椅子などで囲いを作り秘密基地づくりをした。一緒に遊ぶ友達が椅子や作った物を並べ替えると「だめ。動かさないでよ」「ちょっとやめて」と言い続けた。また、Ａ児はイメージを実現したい気持ちが強いため、話が平行線をたどり友達が遊びから離れた。７月、空き箱を使い新幹線を作り始めると、プラレールが好きなＤ児がＡ児の遊びに興味をもった。そして、図鑑を見ながら「ここは緑でいい？」「ドアと窓はどうする？」と話しながら、二人で作り上げた。その後、Ａ児はＤ児と誘い合って遊ぶようになり、次第に他の友達にも親しみをもつようになった。

○　２学期、病院やごみ処理場などのイメージを実現しようと、段ボールやパーテーションなどを使って遊ぶ場や空間を作り、そこで遊んだ。しかし、イメージを実現する過程で、友達の考えには耳を傾けずに遊びを進める様子が見られた。また、段ボールやパーテーションなどの貸し借りを友達に相談されても断った。一方で、自分が使いたい場面では友達に確認せずに使い、度々もめた。借りることができないときは「あれがないとできないのに」と一人でつぶやき続けた。時には教師と一緒に、使いたい物に変わるものを考えたり探したりしてイメージを実現した。

３　本実践で具体化した手立てについて

・保育室に、段ボール、ソフト積み木、プラ段ボール、ゴザ、ハンガーラック、パーテーションを用意しておき、友達と思いを実現する姿を見守った。困っている姿が見られたときは相談にのり、使ったことがある素材や方法に気付かせたり、時には教師から提案したりした。（イ）
・必要な物が足りないことや思いの違いによる「もめごと」が起きたときは、すぐに援助せず見守った。しかし、互いに自己主張を続ける状況が見られたときは、幼児に「どうしたいの？」と言葉を掛けて互いの思いに気付けるようにした。それでもなお時間が過ぎていくときは「このままだとお互いにやりたいことができないけれど、どうする？」と言葉を掛け、幼児自身が決めて動き出せるようにした。（ア・エ・オ）
・「もめごと」が解決したときは、友達の気持ちや行動に思いを寄せることができるような言葉を掛けた。（ウ）

４　保育の実際

Ａ児はパスタ屋さんを始めようと、段ボールやプラ段ボール、カラー積み木などを使って空間を作り始めた。その隣では、Ｂ児・Ｃ児・Ｄ児たちが足湯づくりをしていた。次のエピソードはその中で起きた「もめごと」の場面である。

「使いすぎだよ」	幼児の姿と教師の見取り・援助
Ａ児と足湯づくりの幼児たちは、必要な段ボールが足りないことでもめている。Ａ児は「使いすぎだよ」とつぶやく。その言葉から教師は「もっと使いたいってこと？」と尋ねる。足湯づくりをする幼児には「足湯はそれで大丈夫なの?」と言葉を掛ける（ア）。足湯づくりをする幼児たちは製作した足湯に満足しているため上の空である。そのため教師は、友達の表情が見える距離で話ができるよう行動で促す。自分のイメージを実現したいＡ児は足湯で使っている段ボールの数を数え「16個使いたいな」と、独り言のように話す。Ｂ児は段ボールを数え「それじゃなくなっちゃうよ」と言い返す。教師は、幼児が考える前に提案してしまいそうだが「どうしたらいいかな？」と、互いの困り感に共感しつつ、心の動きを見守る。Ｃ児は方法はないかと上を見上げて考えている。その横でＡ児は自分のイメージのみを教師に話す。教師は、Ａ児が以前パーテーションを使った経験があるため、それを提案するが、Ａ児のイメージとは違うようである。しばらく	

考えていたＣ児は何か思い付いたようにＢ児、Ｄ児と相談を始める。そして、貸すことのできる大きめの段ボールを持って来る。教師は「自分たちも使いたいのに優しいね」と言葉を掛けてしまいそうだが「貸せないならそう言っていいんだよ」と言葉を掛ける（ア・オ）。Ｂ児はＡ児に「使っていいよ」と手渡し、Ｃ児は「これを使うから大丈夫」と、他の段ボールで空いたスペースを囲う。その様子を見たＡ児は、少しずつ表情が晴れたように見える。教師は、Ｂ児、Ｃ児、Ｄ児たちを認める言葉掛けばかりしてしまいそうだが、友達と落としどころを見付け、よりよい解決方法を考えたことを意識に残したい。Ａ児には、友達の行動の裏にある気持ちを感じてほしい。その思いを込め「よかったね。あんな方法があったんだね」と言葉を掛ける（ウ）。するとＢ児は「貸してあげるってことは優しいことなんだよ」と話す。教師は、友達の思いを受け止めるだけがよいこととは思えない。この場面に限らずどの幼児にも、誰かが我慢するのではなく一人一人が納得して次に進んでほしいと考えている。そのため、どのような言葉を掛けたらよいのか悩みながら、「どうしても使いたいときは『貸せないよ』『だめだよ』って言っていいんだよ」と伝える（ア・ウ）。そしてＡ児は、段ボールを借りられたことで空間づくりを再開し、イメージを実現しながら遊んだ。

＜事後の幼児の姿＞

Ａ児は、自分の思いを実現するように遊ぶ日が続いたが、友達がペープサートを始めると、仲間に加わった。Ａ児は友達の話を聞きながら椅子を並べたり、「お客さん呼んでくるよ」と言葉を掛けたりした。そして、友達にペープサートを始められるか確認すると、それを客にも伝え、一緒に遊びを進めた。

自分の「やりたい」という思いだけで遊ぶＡ児だったが、友達とやりたいこと（目的）が生まれると思いを共有し、一緒に実現しようとする様子が見られた。

５　考察

１学期から継続的に幼児一人一人に応じて心が動くような援助を行い、幼児が自身の行動を自分で決める経験を重ねてきた。本実践ではＡ児は自分のイメージを実現することに強い思いがあった。そのため、友達はＡ児の思いを受け止め、双方が納得できるような方法を提案している。Ａ児の表情からは、友達の思いを感じ、自分の思いを尊重してもらったことを実感として感じ取っていると思われる。

この「もめごと」を通して、「人と関わる力」の基礎となる資質・能力である「一人一人の思いが大切にされている安心感」「友達の思いを感じる」「自分の思いを受け止めてもらう喜びを味わう」「友達の優しさに触れる」「友達と落としどころを見付け、互いによりよい解決方法を考えることの大切さを感じる」などが育まれ、友達と思いを共有し、一緒に実現しようとする姿につながった。

Ⅳ　研究のまとめ

１　成果

「もめごと」を幼児一人一人に応じて良質な刺激に変える教師の関わりから、幼児の心は揺り動かされ、言葉にならないもやもやとした感情やそれが晴れたときの感情など、様々な感情を味わえた。そして、葛藤しながら自身で行動を決めることで、自分の意志で行動する「主体性」や感情をコントロールする「自制心」、友達の気持ちを思い描く「想像力」、友達の感情を共有し心を通わせる「共感性」などを育むことができた。そして、友達と共通の目的をもつようになると、それに向かって協働して遊びを進めるようになっていった。

２　課題

実践から、幼児一人一人に応じて教師が関わることが大切である。同時に、発達や内面など目に見えないものを推測して幼児の姿を読み取ることや、瞬時に適切な援助をすることが大切である。今後も幼児の姿を多面的に読み取ることや、幼児一人一人に応じた援助を模索することで、教師自身の視野を広げていく必要がある。